

二〇〇二年度 早稲田大学 博士学位請求論文

二条派和歌の研究 概要書

酒井 茂幸



二〇〇二年度 早稲田大学 博士學位請求論文

二条派和歌の研究 要旨

酒井 茂幸

本学位請求論文（以下「本論文」と略称）は、二条派と称される歌道流派が残した和歌的所産について、弘安一〇年（一二八七）以後を目安として、その歌壇活動・和歌表現・享学史などを論究し、二条派和歌の文学史的・和歌史的意義を明らかにすることを目的とする。

二条派とは、鎌倉後期から室町初期に至る歌道宗匠家としての御子左家嫡流たる二条家を中核に形成された流派で、二条家の血統が断絶した後もその道統が継承され、江戸時代まで歌壇の中心を成した。本論文では特に、鎌倉末期から南北朝期の二条家とその門流を対象を絞り考察した。

以下、本要旨では、各章・節ごとに論旨を要約する。

序章「二条派和歌の成立と展開」において、二条家の成立から二条派和歌の生成と消長の様相を、和歌史の流れに沿って概説し、その中で、本論文が対象とする個別的な問題に関する先行研究や近年の研究状況について摘記した。

第一章「二条為世の生涯と和歌」では、未だ全体像が解明されていない二条為世の生涯について、歌道家宗匠としての活動を主軸に考究した。第一節「正応・永仁期の二条為世」では、まず、永仁三年（一二九五）成立の『伊勢新名所絵歌合』の為世判詞から、従来指摘されている「庭訓」を含む箇所以外にも、用語の使用に関する加難は、『六百番歌合』判詞や『八雲御抄』、『詠歌一体』などの御子左家系の歌書の言説が踏まえられていることを指摘し、永仁元年（一二九三）八月の伏見天皇による「永仁勅撰議」後の為相の勅撰集撰者の競望への非難、為相の元に抑留されている相伝文書の未返還の不満などを押さえた。そして、御子左家伝来の「和歌文書」の為家からの相伝を以て勅撰集撰進の「庭訓」を受けていると称する為相に対してその主張の無効性と為世自身の「庭訓」の正統性を、俊成・定家の言説にまで遡り喧伝する、正応・永仁期の為世の実像を明らかにした。こ

の時点で為世は、為相に抑留文書の返還を求めるとともに、為相が称する「庭訓」の無効性を主張する二方面の対抗措置をとったが、延慶三年（一一三〇）に京極為兼が、伏見院の信任を得て勅撰集の単独撰者に下命されそうになると、為兼が為相から隔心無く文書を見せて貰ったと主張して反論した（『延慶両卿訴陳状』）ため、為相が称する「庭訓」の無効化に傾斜していった。ただ、『延慶両卿訴陳状』で為世が述べる「庭訓」も、実は父祖の歌学書の言説を巧妙に繋ぎ合わせて構築したもので、その体现を打ち出すことで御子左家嫡流としての正統性を訴えたのであった。それは、晩年の歌論書『和歌庭訓』においても同様であった。阿仏尼の嵯峨山荘からの和歌文書の略奪と、為家が晩年溺愛した阿仏尼の腹の為相への文書相伝のために、二条家に歌学書・歌論書の類が著しく不足し、為世は、歌道家当主として深刻かつ不利な状況に陥っていたが、生涯にわたり、父祖の歌論的言説を集約・再構築することに二条家の正統性の根拠を求めた。その機制の端緒を、家業継承期の正応・永仁年間の和歌活動に見出したのが本節である。一方、二条家は、為世父為氏が龜山院の信任を得て続拾遺集を撰進していたため、為世も大覚寺統との結合によって権勢を確実なものにしていった。為世女の大覚寺統の皇族・権門との縁戚関係により、その結合の強化を図った為世の戦略について述べたのが、第二節「贈従三位為子と公宗母」と二人の二条為世女・付・冷泉家時雨亭文庫蔵「冷泉為秀申状案」（一五二号）についてである。冷泉家時雨亭文庫蔵の「冷泉為秀申状案」（一五二号）には、建武新政期に為世が、その女贈従三位為子が後醍醐天皇室となり、「二宮（尊良親王）」「座主宮（宗良親王）」を生んだことにより、「權威無双」を誇り、近江国吉富庄を「押領」しようとしたことが述べられている。確かに為世は、大覚寺統の中枢に為子を接近させていった形跡があり、それは、後二条天皇の内裏歌会で東宮時代の後醍醐天皇の寵愛を受け、結果的には、前述「冷泉為秀申状案」に見えるような勢威を得るに至り、奏功した。しかし、為子は正和三年（一一三二）に没している上、京極派が、正和元年（一一三二）に京極派単独撰の玉葉集を撰進、持明院統の伏見院仙洞で歌壇を領導していたまた、大覚寺統の後宇多院は、当初、尊治ではなく、嫡孫の邦良親王を踐祚させる方針であったとされ、二条家

の皇統との結びつきは、将来的に決して安泰ではなかった。この間に為世は、もう一人の女の昭訓門院春日（後の公宗母）を、為兼と疎隔し大覚寺統に親近していた西園寺家の実衡の室に入れていた。関東申次として朝廷・幕府双方に絶大な影響力を有した西園寺家との縁戚関係は、雌伏期の二条家にとって、大覚寺統とのパイプを維持させ、大覚寺統の治世の到来に備える際の重要な布石となったのであり、公宗母の存在と為世の政治戦略は、看過し難い。なお、本節では、「冷泉為秀申状案」（一一五二号）が二条家と冷泉家との間の庄園訴訟をめぐる新出資料であることに鑑み、その記載内容を読解した上で、和歌史と吉富庄訴訟史の両面から意義を考察した。第三節「二条為世の玉津島信仰をめぐる」では、和歌の神である玉津島明神の信仰史の側から、その取り込みによって歌道家としての勢力を拡大することを図った為世の軌跡を追究した。玉津島社は、住吉社の末社として国基集に初見し、『奥義抄』等の院政期の歌学書にその和歌の神としての由来が語られるが、為家以降、御子左家では、勅撰集撰進前後に住吉社・玉津島社を参詣し、神前で歌合を催すことが慣例化していた。この潮流の中で為世は、玉津島社の方を特に重視した。為世の生涯には、京都歌壇の宗匠として多くの神社・神官との接触が見出されるが、住吉社・玉津島社の関連の事蹟が目立つ。生涯二度目に撰進した続千載集奏覧後（元応元年へ一三一九）には、二条派一党を伴って住吉社で五首歌合を催行・奉納した後、玉津島社に参詣し、「言志一首」なる歌合を勧進した（草庵集、『増鏡』）。また、元亨二年（一三三二）には、玉津島社を筆頭とする「五社歌合」を勧進し、また、その前後、公順から「住吉玉津島両社」の名号を本尊とするための揮毫を依頼されている（拾藻鈔）。『和歌庭訓』では、住吉・和歌三首以上の披講の場に住吉・玉津島明神が姿を現す旨が記される。歌道家庶流の秘伝書では自派の正統性を保証する拠り所として、住吉・玉津島明神が頻繁に活用されているが、和歌の披講の場に顕現するのは、住吉明神のみであり、それに玉津島明神を付加したところに為世の説述の独自性が見て取れる。前述の勅撰集撰進に関連する玉津島社への注目と合わせ、当時、歌人に広がった玉津島社参詣や秘伝書における玉津島明神の権威化などを察知し、二条家の安定と拡大を図ったのであろう。

このように、為世の生涯を見ていくと、御子左家嫡流としての鮮明な道統意識のもと、神祇信仰をも取り込み二条家の存続と勢力拡大を図った形跡が認められるのであり、とりわけ、為定に受け継がれるその歌道家宗匠としての強烈な専門意識や政治手腕（第六章・第三節「歌道師範家としての二条家の行方」参照）、また、多難の中で、二条派の隆盛の基盤を築いた功績は評価されるべきであろう（なお、為世の生涯を通覧できるよう、本章末尾に「二条為世略年譜」を付載した）。その為世門の和歌四天王と称される中で、地下の法体の身分でありながら、その歌才や実力、幅広い交友により、為世没後も二条派を盛り立てたのが頼阿である。

第二章「頼阿の表現方法―歌語の詠作史の視点から―」では、「あらはれて」「うづもれて」「よしさらば」の三つの歌語の表現史を踏まえ、特に他の二条派歌人詠との比較から、頼阿の和歌表現の特性や志向性を析出した。第一節「「あらはれて」考」では、第三句に「て」止めで置く動詞「あらはる」の用法を自然詠を中心に追究し、為世や為藤が主語を係助詞「は」で提示し、上句と下句で視点を移動させ、主題を立体的に把握・描出しているのに対して、頼阿は、多く「も」で提示するため、上句と下句の対比性は希薄で、むしろ「て」止めを時間的継起性の方向で使用していることが判明した。動詞「あらはる」をこうした助詞の表現機能を最大限に活用することにより、第三句「あらはれて」を主軸とする上句に、時間の推移や空間的奥行き、明度の変化などを潜在化して詠み込もうとしており、特にその本領は、本歌取の作に発揮されている。第二節「「うづもれて」考」では、他の二条派歌人が「うづもれて」を、主語となる景物が覆い隠される結果を下句で描写することに使い、上句と下句が、因果関係で連繫しているのに対して、頼阿は、覆い隠す主体が積み重なっていく過程に焦点が当たって、下句へは時間的継起性により接続させていることを明らかにした。「うづもれて」の、因果性を基底とした知的趣向の枠組みが、頼阿にあつては、流動する自然現象の一断面の描写へと相対化されているのである。これは、ほぼ同時代の京極派歌人詠の表現様式にも通じる志向性であるが、京極派歌人の「うづもれて」詠が、景物が埋もれる景そのものを対象化する構図を取るのに対して、頼阿は、詠歌対象を凝視し、その動態に肉薄しよう

としており、その点明らかに一線を画する。第三節「よしさらば」考では、まず、歌語「よしさらば」が、院政期以降、自然詠に取り入れられ、とりわけ、初句「よしさらば」の直後に、本意とは反する主体の意志や対象への呼びかけを詠み、下句でその理由を述べる表現構造が類型化しており、その類型的表現が二条派歌人に継承されていたことを指摘した。そして、頼阿は、「よしさらば」に導かれる詠歌主体の意志を強調・誇張する構成の作を詠んでおり、句切れの間は、主体の情意が傾斜する方向性で接続していることを論述した。頼阿の「よしさらば」詠は、「よしさらば」中の「さ」が指示する場面状況を、歌題に沿ってより細密に、また、対象を凝視して仮構しているのが特色である。以上の三語の表現史の考察からは、為世や為道・為藤らの二条派の専門歌人の趣向の構成手法は、院政期のそれを受け継いでいることが判明し、新古今集時代前後を通過する和歌の表現史の実相の一端が明らかになった。そして頼阿は、こうした従前の二条派歌人の、ともすれば類型化していた趣向の立て方に対して、助詞の表現機能を自覚的に活用することにより、景物を取り巻く自然状況を、時間性や空間的奥行きの中で捉えようとしていたのである。なお、本章（補論）「「速詠の達者」としての頼阿像再考」では、『正徹物語』に描かれ著名な、探題歌会における「速詠の達者」としての頼阿像を、類話や他出文献の検討及び室町期の歌書における頼阿の描かれ方との比較から、元来は、難題・結題を趣向を凝らして詠みこなす頼阿像が、実際に当座の探題歌会で活躍した表象が了俊の脳裏に刻印されていたため、『正徹物語』のように了俊から伝聞されたと推定した。

頼阿の和歌の受容のあり方は、既に室町後期にその穏和で平淡な二条派の歌風の理想として好まれ、そうした好尚が、江戸時代の草庵集の詠歌の聖典としての崇敬につながっていく。

第三章「草庵和歌集の享受史・注釈史」では、江戸時代の堂上派の歌道師範家における草庵集の受容のあり方と注釈・研究活動について考究した。第一節「近世堂上派における草庵和歌集の享受と評価」では、まず、江戸初期に後水尾院が、『麓木鈔』では靈元天皇に草庵集の熟読を勧奨する一方で、『聴賀喜』では、草庵集に対し

て余り芳しくない評価をしている要因を、門弟に対する歌道の説示か、専門歌人としての批評か、の立場の違いに存することを推定した。堂上派歌道家が派生し、多数の幅広い階層の門弟を抱えるに至り、草庵集へと傾倒していくのは、必然的な趨勢であったのである。そして、実作の規範としての草庵集重視は、特に初学の門弟に対する雪玉集の模倣の忌避の説示と表裏の関係にあった。また、草庵集の崇敬が急速に高めたのは、江戸中期の武者小路実陰・烏丸光栄である。その歌道の講釈聞書には、草庵集に関する門弟との遣り取りが多数見出され、歌道師範の側から進められた草庵集の勸奨に対する門弟の率直な反応を伝える。光栄男光胤には、宮内庁書陵部蔵『草庵集聞書』と題する草庵集注釈書があり、堂上派で草庵集の体系的な注釈が着手されていた。この『草庵集聞書』は、春下からの注釈であるが、ほぼ春上の光胤の草庵集歌に関する講釈の聞書が、『和歌聞書』に含まれていることを発見、報告したのが第二節「烏丸光胤の草庵和歌集注釈」である。『和歌聞書』には、草庵集歌の講釈以外にも雑多な歌学的知識の講説をも含むが、草庵集の注釈は、『草庵集聞書』と同様に無注歌を含みつつ、ほぼ家集の配列順に施され、宗匠光胤の側からの所為であることは相違なく、『草庵集聞書』と一連の注釈と考えられる。『和歌聞書』には、寛延四年（一七五二）の記載が見え、両注釈書は、この前後の成立となる。光胤の注釈は、弱冠で初学の門弟（具体的には公仁親王と推定）への講釈であることを反映して、歌句の意味や「辞」の解釈が、歌題に則して丹念かつ簡明に説かれている。先行する香川宣阿の『草庵和歌集蒙求諺解』が本歌・本説等の指摘に力点を置くのとは異なる志向性である。第三節「京都大学文学部蔵『草庵集啓蒙』の成立と意義」では、裏松固禪（光胤実弟）の著述になる注釈書として従来知られていた、京都大学文学部蔵『草庵集啓蒙』について、日野弘資・烏丸光栄『鼈頭草庵和歌集』と密接な関連を有し、また、上部欄外に固禪が記した卜山（光胤）と荒木田盛美との問答に、草庵集歌に関する光胤独自の見解が多く含まれていることを論述した。『草庵集啓蒙』には、『鼈頭草庵和歌集』が「日野本」「烏丸家本」と記載されて引用されているが、その本文をやや子細に検討すると、固禪は、形態の異なる二本の『鼈頭草庵和歌集』を披見していたこと、また、「烏丸家本」

は、光栄から光胤へと相伝された『鼈頭草庵和歌集』がかつて存在したことが判明する。また、上部欄外の光胤と盛美との問答からは、草庵集の歌意のみならず、使用されている歌句の現在の使用の可否なども質疑され、草庵集受容の曲折した様相が見て取れる。

第四章「二条派関連の歌書の諸本論」では、いずれも二条派和歌を考察する上での基本文献である『和歌用意條々』と『鼈山殿七百首』の諸本論を収めた。第一節「『和歌用意條々』の諸本と成立」は、正応五年（一二九二）以後の成立で、二条為世の著作である歌論書『和歌用意條々』の現存諸本二五本（板本二種を含む）を流布本系と異本系の二系統に大別し、流布本系内部を（一）内題、（二）本文異同、（三）奥書により第一類と第二類に分類した。第一類と第二類で特に明確な分類基準となるのは、内題が「和歌用意條々」か、あるいは「初心用意條々」であるかと、三箇所本文の出入りである。第一類は江戸期を遡る伝本が存在しないが、第二類の「初心用意條々」には、伝二条為重筆の南北朝期写の鶴見大学図書館本が存する。ただ、鶴見大学図書館本は、本文の脱落や字句の誤写が散見され、同様な異同は、他の第二類「初心用意條々」諸本全てに見え、また、奥書に「為重卿自筆」本を以て書写した旨が記されるから、第二類本は、鶴見大学図書館本から派生したことが想定される。異本系の一本である水府明德会彰考館蔵『愚存條々』（江戸中期写）は、未紹介の新出資料で、書写奥書に文明七年（一四六六）の勘解由小路（海住山）高濑の名が見える。本文は、一文単位の出入りを検討してみると、『愚存條々』では、本歌取の例歌が大幅に減少している一方で、『愚存條々』の側で増補されている叙述も見出される。これらの記述内容をやや子細に吟味すると、『愚存條々』では雑然としていた記述が、『和歌用意條々』で整理され明確化していく流れを押さえることができ、『愚存條々』は、『和歌用意條々』の抄出本ではなく、原型と位置づけ得る。当初、特定の門弟を対象として叙述された『愚存條々』が、多数の門弟への開かれた説示としての『和歌用意條々』へと改変されたのであろう。第二節「『鼈山殿七百首』伝本考」では、『鼈山殿七百首』の現存諸本一三本（板本二種を含む）を作者名・和歌の有無・歌順の異同・本文異同等七つの基準

乃至は目安から、第一類と第二類に分類し、第二類内部を第一種・第二種に細分した。『龜山殿七百首』には、作者名が伝本により相違している箇所が二七箇所に上るが、他出文献との照合も含め本文批判を施すと、第一類本の方が、「同」の誤用のような比較的単純な誤りが生じる前の形態を留めている。本文の異同も、大勢としては、第一類本が先行していると考えられ、後宇多院の仙洞歌壇の歌会で証本が伝存する数少ない作品である本七百首は、第一類本を底本として、第二類本第一種で校合を施すのが有効である。

さて、鎌倉末期の和歌を考察する上で看過できない事象に、鎌倉歌壇の問題がある。為氏も為世も庄園訴訟で生涯頻繁に京と鎌倉を往還していることに想到するならば、鎌倉歌壇が生み出した歌学書等は、京都の二条宗家と無縁に成立したとは決して考えられない。そこで第五章「鎌倉歌壇の諸相」では、鎌倉末期に関東で成立したと思われる作品について、二条宗家の側から眺め、二条宗家と鎌倉歌壇の交錯を明らかにすべく、一章を設けて論述した。第一節「『和歌三重大事』の諸本と成立」では、新出の兼築信行氏蔵『愚秘抄』所収本（江戸後期写）を紹介しつつ、まず、従来知られている宮内庁書陵部蔵本の「写本奥書」において為氏からの相伝を記す覚瑜と円瑜の素性を解明し、同「授本奥書」で為氏・為世からの相伝本を理達が伝授したとする見性が名越時基の男で、新後撰集に一首入集する武家出身の僧侶歌人である事を突き止め、「写本」系が鎌倉中期に宇都宮歌壇で成立、それを理達が為世を頭に仰ぎ、「授本」へと改変して見性に伝授したことを明らかにした。二条派の少壮歌人である理達によって改変された本書は、「二条派周縁で秘伝書として伝授されていたことが知られる。「写本」系の原型を、他本との校合から辿っていくことは、宮内庁書陵部蔵本の現状からは困難であるが、「授本」系の原型には、新出の兼築信行氏蔵本を併用した本文批判により、かなりの精度で遡源することが可能である。また、本書の原型を鎌倉中期と確定すると、家隆流の秘伝書『和歌灌頂次第秘密抄』の引用歌との一致により何らかの関わりが想定される。そして、本書で説かれる助辞論は、『八雲御抄』第十六・用意部で言及されたのが嚆矢とされるが、その後の鎌倉中期の展開史は、本書により跡付け得、そこに本書の意義も存する。第二節「『愚見

抄』伝本考」では、室町初期写の冷泉家時雨亭文庫蔵本を初めとする冷泉家伝来の新出の写本三本を主軸に従来の第Ⅰ類の甲類（冷泉家系統）と乙類（飛鳥井家系統）の分類基準を訂正し、冷泉家伝来の過程における本文の変容の様相を論じた。また、引用歌を中心とする本文批判から、冷泉家時雨亭文庫蔵本の優位性を実証し、文正元年（一四六六）写の龍谷大学大宮図書館写字台文庫蔵本の本文には、甲類（冷泉家系統）に属し古態を残すものの、脱落が存することを指摘した。なお、龍谷大学本の相伝奥書で為氏の名が見えることは注意すべきで、『桐火桶』第三類本『幽旨』本系、『愚秘抄』二冊本の奥書に類似していることから、為実流の人物による付加と考えられ、本文には、『愚秘抄』二冊本との連関を示唆するところもある。今後は、冷泉家時雨亭文庫蔵本を底本として、東北大学付属図書館蔵秋田三春家旧蔵本により校合・校訂し、原本の復元を目指すことが必須である。また、その場合、『愚秘抄』二冊本に取り入れられた『愚見抄』の本文も参考にならう。第三節「勅撰集撰進の口伝と故実―『愚秘抄』成立論序説―」では、まず、『愚秘抄』（鶴本末）の諸本分類の作者圈に関する先行研究を踏まえ、第三類本の無刊記板本等に見られる「私此奥口伝所々抄出」の内容を吟味した。歌道家や歌道流派を意識している叙述に着目すると、二条家側の人物による著述と考えられること、また、応制百首の詠進や奏覧の儀の次第が、第一類本の歌学大系本からは（第二類本の東北大学付属図書館蔵本では、該当箇所を欠く）第三類本で冒頭に移行し、より詳細に説かれている。こうした宮中における当座の嗜の儀の作法や次第の口伝は、歌道家における一子相伝の庭訓であり、相伝奥書に仮託される為氏周辺から、直接間接に見聞きし得た人物の所為で、二条家周縁の人物として、やはり為実の存在が浮上してくる。また、『愚秘抄』の成長過程は、第二類本の東北大学本の位置付けなどの問題があり、第一類の歌学大系本から第四類の群書類従本や冷泉家時雨亭文庫蔵本へと順次増補していったとは単純に考えられないとされており、この「私此奥口伝所々抄出」からも、第四類の本文を「抄出」して第三類本の「私此奥口伝所々抄出」が成立、後にこの部分が切り離され、第二類本の東北大本が成立したと想定することも可能である。また、第二類本以降の『愚秘抄』二冊本では、『愚見抄』が大幅に取

り込まれ、このことを以て冷泉家色を出そうとしたとする見解も過去には提起された。しかし、二冊本の中でも第四類本は、そうした親冷泉家・反二条家の姿勢が鮮明であるが、第三類本では、二条家に抗する態度は希薄で、第三類本で為氏が相伝奥書に登場することと連関すると考えられる。第四節「冷泉為相の『海道宿次百首』について」は、東海道の宿駅名を歌題とした、為相の特異な個人百首（証本散佚）に関する考察である。夫木抄から三〇首の佚文が修正されるが、歌題の宿駅名は、和歌に馴染みの薄い地名ばかりで、「八橋」「鏡」「守山」などの名所が詠まれているのは、これらが宿駅であることに起因する。本百首の佚文三〇首の内、隠題の使用が一首、掛詞が一〇首、縁語が三首で、隠題と掛詞の詠歌が全体の三分の一強を占める。ただ、「海道宿次百首」は、東海道の旅で目にした実景が基盤にあり、各地を遊覧しながら旅を続ける作中主体を仮構し、かつての旅を追体験している。そして、こうした技巧は、各地の風光を讃美する詠作主体を設定・造型する方向で使われている。また、先行する紀行文に比較すると、旅の歌としても、旅愁や郷愁といった感傷は詠まれず、あくまで主眼は、宿駅各地の情景を描写することに置かれ、一見過度とも見える修辞技巧が、一首の趣向に波及し、かつて目にした情景や景物を、読者に鮮明に印象付ける効果や、当地の複数の風物を一首の中に詠み込む機能を果たしている。為相が念頭に置いた読者は、東海道沿道や鎌倉側の人々と考えられ、父為家の『詠歌一体』における名所の詠み方の説示や母阿仏尼が為相・為守に当てた名所歌の手引書とされる『十六夜日記』を創作動機の根底に存し、東海道沿道の歌人達を読者対象として明確に意識した時、「海道宿次百首」が結実したのであろう。

第六章「鎌倉・南北朝期の和歌の表現史と「場」・総説」では、鎌倉末期から南北朝期の和歌の「場」の特色として探題歌会に注目し、合わせて、為定以降の四人の二条家の歌道師範の和歌事蹟を概説しつつ、歌道家宗匠としての意識の変容等の問題を論じた。第一節「鎌倉・南北朝期の探題歌会について」では、鎌倉期以降の探題歌会の記録を網羅的に調査・整理した上で、その機能の変容を論述した。元来、探題歌会とは、非公式な形態の歌会であり、時に即興性や当座性を伴ったことが、『春の深山路』の、東宮時代の伏見院の御所における、当座

の探題歌会の記事から知られる。鎌倉中期には『吾妻鑑』や『寂恵法師文』等には、宗尊親王と真観が主導した関東歌壇で探題歌会が催されたことが記される。弘長年間までは、専ら鎌倉歌壇で探題歌会が催行されていたのであり、文永二年（一二六五）に後嵯峨院が召した『白河殿七百首』において探題形式を採用したことは、探題歌会史上先駆的な出来事であった。そして玉葉集には、探題歌会詠が前例に比して多数入集し、『歌苑連書事書』で非難されるに至る。頼阿は、『井蛙抄』巻六・雑談において、当座の統歌の詠草や短冊を人に見せて直させたり、後のために控えを取ったりすることが、最近目につくことに難色を示しているが、これは、鎌倉末期、当座の探題歌会の「当座」性が薄れ、公式性を獲得していったことと関連があるう。すなわち、元亨二年（一二三二）の「龜山殿千首」や「龜山殿七百首」等、元亨年間には後宇多院仙洞において探題歌会が多数催された。また、後宇多院没後は大覚寺統二・二条家の詠歌の「場」は、後醍醐天皇内裏に移行するが、探題歌会の記録は多く、また、正中二年（一二三五）奏覧の統後拾遺集以降、二条派撰集の勅撰集においても探題歌会からの入集歌数が増大していった。つまり、探題歌会の証本が勅撰集の撰歌資料として活用されるにつれ、探題歌会の「場」は勿論、それに望む歌人の意識にも変化を及ぼしたのである。第二節「「短冊」考」は、この探題歌会に際して使用された短冊について、近年の研究状況の進展を踏まえ、資料面における問題をまとめたものである。近時、鎌倉中期から鎌倉後期にかけての短冊資料の発見が相次いでいるが、家集等における他出文献は、公的な定数歌であることが多く、一度内々の歌会で詠んだ作を、応制百首などで再利用する様相が明らかになってきた。MOA美術館蔵短冊手鑑二四帖の内、一四帖目に頼阿の短冊が存するが、この短冊和歌は、歌題・歌本文とも一致する詠が、頼阿法師詠に見える一方で、草庵集に歌題や歌本文の第二句が異なる詠が入集する。これは、一度頼阿近親の内々の歌会で詠んだ作を、一部手直して違う歌題の詠に再利用したものと思われ、少なくとも、短冊和歌Ⅱ・頼阿法師詠の詠と草庵集の詠は、出典を異にしている。この一部手直して再利用するという行為は、短冊による当座歌会への詠進が、兼日の歌会に次第に同格に成っていく過渡期を示すものである。つまり、『愚問賢注』

で頼阿が短冊による当座歌会と懐紙による兼日の歌会には、同様な心構えで望むよう説いている上、南北朝中期以降には兼日・兼題の歌会にも短冊が使用されており、短冊が公式性・公開性を獲得するにつれ、短冊により内々の歌会で詠んだ作を、後に定数歌などで再利用することは意味を成さなくなり、鎌倉中期から南北朝期の一時期の所為であったと推定した。第三節「歌道師範家としての二条家の行方」は、二条家の総帥二条為世の、暦応元年（一一三三）八月の没後の概説である。為世嫡孫の為定は、新千載集を延文四年（一一五九）に撰進した後翌延文五年に没する。新千載集成立のわずか四年後の貞治二年（一一六三）には、為明に勅撰集撰進の命が下るが、為明は返納・完成を見ないまま老病により急逝し、頼阿・経賢の助成と後補により新拾遺集が成立した。そして新後拾遺集を、為定子為遠が撰集、その「大中風」による頼死後為重が完成させたが、それは至徳元年（一一三八）のことであった。その為重も翌至徳二年に横死し、為重子為右は応永七年（一一八四）十一月に守護上野民部大輔入道によって誅殺され、和歌の家としての二条家の血統は実質的に断絶したのである。そもそも、歌道師範家とは、勅撰集撰進事業が最重要な世業であり、それを世襲することが公家社会における家の存続につながった。よって、南北朝期から室町初期に至る流動的な政治状況の中では、いかにして時の公武双方の権力と融和・結合していくかが、歌道家存続の上での課題となった。為定は、祖父為世の資質を受け継ぎ、生涯を通じて勅撰集撰者に対してなみなみな意欲と実績を示し、後醍醐天皇の吉野潜幸後、巧みに足利將軍家に接近した。そして、為明も、將軍義詮に重用され、為定嫡子である為遠を措いて勅撰集撰者の地位の榮譽を得た。しかし、為明没後の二条家では一度は足利義満の支持を得た為遠は、性急情のため義満の疎外を受ける中で頼死し、二条良基から義満の歌道師範に推挙された（後掲『近來風体』）為重も「山科蔵入入道」により「撲死」し、二条家内部の衰弱は決定的なものとなっていたのである。とりわけ、近時明らかになった為右の悲惨かつ不名誉な最期は、二条家の最末期の腐敗、為右の歌道家宗匠としての自覚の欠如等、投げかける問題は少なくない。ただ、為遠以降の宗匠の晩年の悶着や事件の殆どが武家に関係するものであることは偶然とは考えられず、内裏歌会に

参仕し、御製講師などの重責を全うすることを第一義と考え、宮廷社会に閉塞し、武家政権と良好な関係を保ち得なかったことが、衰退へと向かった要因ではないかと推測した。